

やまなし百年企業

やまなし 百年企業 〈34〉

体制を築いた。47年に株式会社化し、57年には社名をマルアイに変更。紙製の冷菓袋の売り上げが急増し、従業員数も500人超に達した。68年には冷菓袋用にボリエレンの自社製造を開始。紙と化成品を並行して手がける企業は珍しかったが、後に食品関連包材や精密部品の保管・輸送に使われる導電性シートなどを製造し、同社を支える事業に発展させた。

紙の需要減少

【社名】マルアイ
【代表】村松道哉
【創業】1888(明治21)年
【業務内容】日用紙製品、化成包装資材の製造販売
【本店所在地】市川三郷町市川大門2603
【電話番号】055(2)72-1111

紙製品製造のマルアイ(市川三郷町)は、今年で創業134年を迎えた。全国各地に販路を持ち、祝儀用品や封筒など生活に身近な紙製品や、食品関連包材や電子部品関連包材などの化成品を展開。7代目の村松道哉社長(64)は「『包む』ことの価値の創造にこだわり、感動を生み出す会社であり続けたい」と話す。

シェアトップ

終戦後、愛作氏は従業員を路頭に迷わせないために事業

紙製品では、86年にカラー

を誇り、90年代には売り上げが120億円近くに達した。

道哉社長は「過去の新たな挑戦が今の会社を支えている」と強調。「創業以来そうであったように、『包む』ということを多角的な視点で捉えながら、時代に必要とされるもの・こと・気持ちを追求

マルアイ 1888(明治21)年創業

「包む」を多角的に創造

ルーツは千年以上の歴史を持つ市川和紙。伝統技法の手すきを家業としていた村松家の長男・富吉氏が1888(明治21)年、父・愛作氏と地産の和紙を仕入れて行商を始め、「紙愛商店」を開業した。1939年、富吉氏の長男が愛作の名を継ぎ、2代目に就任。より安価な機械すき和紙を売り、関東を中心に商圏

拡大を目指し、輪転機や各種印刷機を相次いで導入。一貫生産に向けて工場も整備し、祝儀品や包装紙、封筒など生活に身近な日用紙製品の量産

水引や千代紙などを用いた「デザイン金封」を開発。祝儀文化に新たな価値観を提示し、全国で定着化した以降、祝儀用品の国内シェアはトップ

つづくと毎年アイデアを出していきいたい」と先を見据え、新たなヒット商品も生み出した。次回(11月21日)の予定で

〈古守彰〉



市川和紙の産地の中心に構えるマルアイ本社
＝市川三郷町市川大門

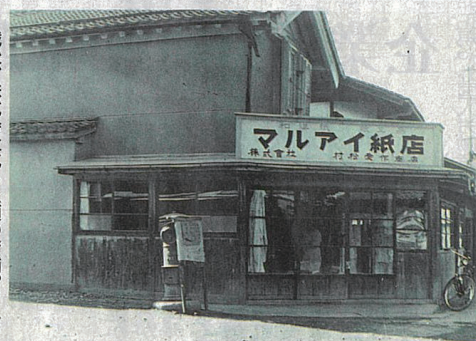
あの時

【明治】初代の村松富吉氏が父・愛作氏とてんびん棒を担いで手すき和紙の行商を始める。

【大正】仕入れ先を県外に広げ、機械すき和紙の販売を始める。

【昭和】国の軍需工場に指定され「風船爆弾」の風船部分を製造。戦後、日用紙製品の製造を始め、一貫生産に対応する大規模工場を整備する。化成包材の製造も始める。

【平成】文具店の減少により、量販店に販路を移行して拡大。業界に先駆けた「新金封」で祝儀品のマルアイとして知名度が高まる。化成品事業を拡大。



戦後、株式会社化した頃の店舗。マルアイの通称を店舗名に使っていた